

古墳造営の終焉と 寺院造営の始まり

香取遺産

Vol. 56



▲木内廃寺跡



▲木内廃寺跡出土軒丸瓦

木内廃寺跡は、木内地区に所在する当地方で最も早い時期に建てられた寺院跡です。遺跡は、黒部川が流れる広大な低地をみわたす台地上にあります。

これまでの調査で、建物の基礎である基壇の一部と瓦類が発見されています。

基壇とは、数10cmから1m以上まで土盛りしたもので、その上に建物を建築します。古い時代の寺院建築では、地面を掘り下げて地中部分からしっかりと固めて基壇を構築する工法をとります。この工法を掘込地形と呼んでいます。この掘込地形がみつければ、基壇の地上部分や礎石が失われていてもそこに建物があつたことが分かります。

建物跡の周辺からは多くの瓦が発見されています。これ

らの瓦は、最近の発掘調査によつて、本遺跡の西方約1kmにある清水入瓦窯跡で焼かれたものであるがわかりました。

木内廃寺跡出土の瓦には、山田寺（いわゆる大化の改新で中大兄皇子や藤原鎌足とともに活躍した蘇我倉山石川麻呂が建てた私寺。648年完成）系の瓦とされる単弁八葉蓮華文に二重圏線文の縁をもつ軒丸瓦と重弧文の軒平瓦があります。おそらく、これらが創建時の瓦と思われる。

瓦の研究と清水入瓦窯跡の発掘調査の成果によつて、木内廃寺跡の寺院造営時期が7世紀第4四半期ごろまで遡ることがわかってきました。

これよりもすこし前、この地域は下海上国造が治めて

いました。木内廃寺跡の北東約1.5kmには下海上国造とその一族の墳墓と考えられる城山古墳群があり、7世紀中ごろまでは古墳が造られていました。しかし、7世紀後半になると古墳は造られなくなり、間もなく寺院の造営が始まります。

7世紀第4四半期の寺院造営は、ほぼ全国的なものであり、地方の有力氏族に仏教を勧奨するなど、仏教を全国に普及させようとした天武朝の仏教政策によるものと思われる。

この時期の寺院造営には、地方行政官として国家権力機構に組み込まれたかつての国造など、有力氏族が積極的に関与したものと思われま

す。 問い合わせ 生涯学習課 1224